

## ハーヴァード大学におけるホレス・G・ラント教授による 古代教会スラヴ語の授業 —木村彰一先生の記念に代えて—

沼野 充 義

私は残念ながら、木村彰一先生の授業に出席したことは一度もない。木村先生が東京大学文学部（および人文科学研究科）を退官されたのは1975年3月、私が駒場（東京大学教養学部）の教養学科を卒業して、本郷の人文科学研究科に進学したのは1977年4月のことで、木村先生退官後既に2年が経っており、本郷のロシア語ロシア文学研究室はすでに川端香男里・栗原成郎両先生の二人体制になっていた。

そんなわけで、学生・院生時代にはほとんどご縁がなかったのだが、私のスラヴ語スラヴ文学関係の恩師は——本郷の川端・栗原両先生だけでなく、駒場の北垣信行先生、米川哲夫先生、佐藤純一先生、直野敦先生、吉上昭三先生、島田陽先生、森安達也先生、そして教室ではなく渋谷の「ひな春」でお話をうかがう機会が多かった千野栄一先生なども含め——ほとんど皆木村先生の薫陶を受けた方々で（まさにキムラ・シューレと呼ばれるに相応しい、綺羅星のごとき *плеяда* だった）、その意味では——自分で言うのもおこがましいが——私は木村先生の「孫弟子」にあたる。

そんな縁もあって、木村先生の没後、吉上・森安先生のお二人が中心になって企画したロシア文学関係の論集『魅せられた旅人——ロシア文学の愉しみ』（恒文社、1987年）の編纂にあたっては、駒場のロシア語教室のスタッフになったばかりの私も微力ながらお手伝いすることになった。これはスラヴ文献学・言語学だけでなく、近代ロシア文学にも並々ならぬ深い造詣をお持ちで翻訳も旺盛に引き受けられた木村先生が、主に翻訳に寄せた解説などを集めたもので、類のあまりない名著である。ちなみにここで僭越ながら少しだけ自慢をしておくと、この本のタイトル案を出したのは私だった。真面目な駒場の先生方は（失礼ながら）「ロシア文学論集」といった固いタイトル案しか思いつかれなかったもので、レスコフの小説のタイトルを（それも木村先生が訳されたものの一つである）そのまま本のタイトルにしたらどうだろう、とおずおず若僧が提案したところ、採択されたのだった。これはスラヴ文献学の世界に魅せられて、語学文学の様々な領域を精力的に旅した木村先生の著書にまことに相応しいタイトルだったのではないかと、いまにして思う。

しかし、もっと学問的なつながり——というところ、これまたおこがましいのだが——を感じたこともじつはその前にあった。それは、私がこんなことを言うと、素人の妄言と響きを買おうなのだが、古代教会スラヴ語を通じての縁である。1981年から1985年にかけて

て、約4年間、私はアメリカのハーヴァード大学大学院博士課程でスラヴ語スラヴ文学を学ぶ機会に恵まれたのだが、ハーヴァードは私よりさらに30年近く前、1953年から1954年にかけて木村先生が留学された場所でもあった。木村先生はそのとき、まだ60歳にならないロマン・ヤコブソンの授業にも出ていたという噂はかねがね聞いていたので、ハーヴァードでスラヴ言語学のホレス・ラント教授（1918-2010）による古代教会スラヴ語の授業に出るようになった私は、まっさきにラント教授に「木村先生を覚えていますか」と尋ねたのだった。するとラント教授は、「もちろん」と懐かしそうな顔をしたのだった。ラント教授はヤコブソンの愛弟子で、木村先生がハーヴァードに留学した当時、新進気鋭のスラヴ言語学者としてすでに教鞭を執っていたので、木村先生は少し年下のラント教授の授業に出ていたのだが、ギリシャ語・ラテン語の素養では木村先生のほうが上だったという話を、日本の木村シュレーの先生方から後で聞かされ、なるほど、と誇らしく思ったものだった。

ここで、どうして文学を専攻する私がラント教授の古代教会スラヴの授業に出たのか、またその授業はどんなものだったのか、この機会に少し書き留めておきたいと思う。そうすることが、直接教えを受けないまま終わってしまった木村先生を偲ぶ私なりのやりかたであるし——なんといっても『古代教会スラヴ語入門』（白水社、1985年）は、木村先生の最も重要な業績の一つである——また何よりも、日本のスラヴィストのためにも多少は有益なこともあるのではないかと期待するからである。

アメリカの大学院の授業は厳しい。博士論文を書き始める前に通常2年間にわたって「コースワーク」が課せられ、所定の単位を取得しなければならないのだが（それは日本と同じで、じつは日本の大学院のシステムはアメリカからの借り物である）、学科ごとにどのような種類の授業を履修しなければならないかの具体的な決まりがある。ハーヴァードのスラヴ語スラヴ文学科（Department of Slavic Languages and Literatures）博士課程の場合、必修科目は文学専攻者と言語学専攻者でももちろん異なるのだが、ロシア文学専攻者の場合、文学については中世、19世紀、20世紀、小説、詩、演劇のすべてをカバーしなければならないうえ、第2スラヴ語スラヴ文学も必修、さらにはスラヴ言語学の授業にも出なければならない。特にラント教授の古代教会スラヴ語（Old Church Slavonic、口語では通常OCSと略称するので、今後はここでもOCSで通すことにする）は文学・言語のどちらを専攻するかを問わず、スラヴ科の大学院に入った者がまず経験しなければならない「火の洗礼」だった。「火の洗礼」というのは大げさではない。OCSのあらゆるテキストがすべて頭の中に入っているラント教授の驚異的な学識、綿密に準備されたきめ細かく明快な授業、言葉に細心の注意を払わない怠け者を容赦しない厳しき——これらがあいまってこの授業はハーヴァードのスラヴ科の様々な授業の中でも、もっとも魅力的であると同時に

最も難しく、特に文学専攻者には最も恐れられた（しばしば落第者を生み出した）授業だった。大学院に入ったとたん、いきなりこの授業に直面した大学院生は、スラヴ・フィロロジの魅力と難しさをたたき込まれることになる。ラント教授の要求は厳しく、言語学専攻者でも優の成績を取れるとは限らないという評判だった。「火の洗礼」とは私が勝手に頭の中で思っていたことだが、ひょっとしたらあの頃、同級生たちとの間でもすでにそんなことを言いあっていたのかもしれない。実際、ラント教授の後を継いで、ハーヴァードでスラヴ言語学を担当している Michael S. Flier の文章を読んでいたら、ラントの OCS はハーヴァードの院生の間では「恐ろしくも有益な baptism of fire」であると見なされていたという記述に出会い、我が意を得たりと思ったことだった。

ラント教授の授業が実際にどんなものだったか、当時の私のノートをもとに、ここで簡単に紹介しておきたい。私が 1981 年から 1983 年の 2 年間に履修した、ラント教授によるスラヴ言語学関係の授業は以下の 3 つあり、それぞれについて、ノートと配布されたプリント類を束ねてファイルしたものを、私はいまでも大事に宝のように（いまでは半ば持ち腐れではあるのだが）保管している。3 冊合わせると厚さ 10 センチ、重さ 5 キロほどになるものだ。

1981-82

Fall semester: Linguistics 250. Old Church Slavonic

Spring semester: Slavic 265a. The Structure of Modern Russian

1982-83

Fall semester: Slavic 261. Historical Phonology and Morphology of Russian.

これ以外にもラント教授は、“Introduction to the West Slavic Languages”, “Introduction to the South Slavic Languages”, “Readings in Medieval Slavic Texts”, “Comparative Slavic Linguistics”といった授業を交代させながら次々に担当し、2 年か 3 年、彼の授業に出続ければ現存するすべてのスラヴ語と、OCS と中世スラヴ語テキスト講読といった領域をカバーできるようになっていた。だから私が履修したのは、その一部に過ぎない。

上に掲げた 3 つの授業のうち、まず OCS についてだが、ラント教授には誰もが知っている有名な OCS の文法書がある。*Old Church Slavonic Grammar* というタイトルの本で、1955 年に初版が出て以来、ラント教授は終生改訂を続け、2001 年には改訂 7 版に至っている (Berlin and New York: Mouton de Gruyter)。私が留学した当時の最新版は、1974 年の改訂 6 版 (The Hague: Mouton) だったが、Mouton 社が出す専門書はよく知られているように高価で、大学院生の手が出るようなものではなかった。そのためラント教授は自分の

OCS の履修者には本を買わせず、本を丸ごとコピーしたものを用意してくれた。

分厚いコピーの束を抱えて、1981年9月の下旬、初めての授業に出席したときのことを私はよく覚えている。世界的に高名なスラヴ言語学者が、自分の書いたこれまた有名なOCSの文法書を使いながら、どんな授業をしてくれるのだろうか、これから何ヶ月かかけて、複雑なOCSの文法をどのように教えてくれるのだろうか、と私は期待に胸を膨らませていた。ところが驚いたことに、ラント教授は教科書の説明も、文法の手ほどきもほとんどせず、最初は教室ではOCSのアルファベットの書体を確認するくらいで、教科書は2週間程度で全部ざっと自力で目を通しておきなさい、と言うのである。ラントの教科書は簡潔で、システムティックな記述で際だっているが（構造主義的な文法記述のよい手本とも言える）、それだけにかなり難しい。いきなり目を通せと言われても、言語学の素養がなければ歯が立つようなものではない。

そして2週間後には、いきなりOCSのテキストを教室で少しずつ読んでいくという、楽しくも苦しい授業が本格的に始まった。アメリカの授業のやり方は、日本よりずっとインテンシヴで、1つのコースにつき週1回ではなく、2回または3回も授業を行うというのが普通である。ラントのOCSの場合、毎週月水金の3回、午後2時～3時に授業が行われた。いまノートを確認したところ、私が履修した1981年度秋学期の場合、9月21日月曜日に始まり、翌年1月15日金曜日まで、44回の授業が行われている。中間試験も一度あり、また授業終了後、1月21日には3時間もの時間をかけて、期末筆記試験も行われた。

講読の進め方はどうであったかという、テキストはすべて様々な写本からの福音書の抜粋で、事前に一学期分の、読むべきテキストが決められ、最初は一回に2、3行から始め、次第に5行、10行といった具合に多くしていき、学期末には一回20行くらいというスピードになった。また様々な写本を並行して読んで比較するというパラレル・テキスト講読も行われるようになった。一学期を通して読んだテキストの総量は約400行になる（なお、ここで言う「行」とは聖書のverse、つまり日本語では一般に「節」と呼ぶものにあたる）。

400行という量はOCSのテキストに取り組んだことのない人には、さして多く見えないかもかもしれないが、これを厳密にラント式に読解するのは一大事業である。彼の授業は、特に最初のうちは、すべての語の形態を厳密にidentifyしながら、それこそ一語一語舐めるように進められた。しかも小人数の演習形式なので、一回の授業につき平均少なくとも3度は自分の答える番が回ってくる。履修者はスラヴ科の博士課程に入った同級生8名。そのうちロシア人1名、ウクライナ系アメリカ人2名、スイスで修士号を取得したポーランド人1名といった顔ぶれである。「生粋」のアメリカ人は確か3名しかいなかったと記憶する。質問されても、予習が間に合わなかったので分かりません、などと答えるような

事態が2度あれば、もう単位はもらえないと覚悟しなければならない。また一応予習してきても、正しく答えられるとは限らない。同級生のロシア人（ソ連からの亡命者）は、実際、いつもでたらめな回答をしてラント教授に怒られていたが（彼女は「でもロシア語ではこうです」などと反論したものの、そのたびにラント教授に「OCS はロシア語ではないんだよ」とやんわりたしなめられた）、やがてドロップアウトしてしまった。彼女はおそらくその後、スラヴ言語学とは縁のない、幸福な生活をアメリカで送ったのではないかと思う。

しかし、言語に関心を持つ人間にとって、この授業は天啓にも等しいものだった。私の場合、ロシアとポーランドの文学を専攻しようと思ってアメリカに渡ってきたと思ったら、いきなり OCS の強烈な洗礼を受けて、予習復習のために毎日5時間も6時間も勉強しなければならず（もちろんそれ以外に専門の文学の勉強も同様にしなければならなかった）、睡眠時間を切り詰める毎日で、一体何のために自分はわざわざアメリカまでやってきたのかと思って泣きたくなることもあったが、その忘れ難き OCS の日々こそ、私にとってもっとも充実したアメリカ留学の日々だったのではないかと思う。ラント教授の授業は厳しだけでなく、じつによく構成され、しかも履修者に対する配慮も行き届き、何度も提出しなければならぬ宿題 (written assignments) は、毎回丁寧な添削が施されて返ってきた。そのため、ラントの授業のおかげで言語の魅力にとり憑かれ、結局、文学から言語学に専門を切り替えた人もいたと聞く。オリガ・ヨコヤマ先生（現在カリフォルニア大学ロサンジェルス校教授。もとハーヴァード大学教授）もその一人（と本人からうかがった記憶がある）。じつは私も一時期そのようなことを思わないでもなかったのだが、さすがにそのためには、幸か不幸か、もう臺が立ちすぎていたようだ。

OCS の後に履修した2つの授業、すなわち“The Structure of Modern Russian”と“Historical Phonology and Morphology of Russian”についても簡単に触れておく。「現代ロシア語の構造」は、現代ロシア語の共時的な構造分析を主眼としたもので、取り上げた話題はアスペクト、動詞のモルフォロジーのシステムティックな一元的説明など多岐にわたったが、一番の中心は、現代ロシア語を morphophonemic（形態音素論的）な観点から分析することで、任意のロシア語の語句に対して、morphophonemic transcription を与える作業にかなりの時間を費やした。これは現代ロシア語を材料としているので、OCS よりも取っつきやすいのだが、じつは構造的な分析にどうしてもある種の「推定」が紛れ込んでしまうため、微妙な点が多く、私には OCS よりも難しく感じられた。ラント教授が構想していた現代ロシア語の形態音素論的な分析の独自のシステムについては、別途専門家による記述が必要であろう。

最後に履修した「ロシア語の音韻論と形態論」という授業は、たまたまその年の出席者の大半が文学専攻者であったからか、ロシア語の言語学的分析に力点を置くのはやめ、11世紀から18世紀までの様々なテキストを講読することによって、ロシア語史を辿るという、私には親しみ易いタイプの授業になった。OCSの場合と違って、こちらの授業では読む速度はかなり速かった。取り上げたテキストは、『オストロミール福音書』『スヴャトスラフ文集』『アルハンゲリスク福音書』『原初年代記』『ピョートルとフェヴロニアの物語』『ロシアの船乗りワシーリイ・コリオツキーの物語』の5点である。11世紀から12世紀に成立した、キエフ時代の最初の3点はごく短い抜粋を読んだだけで、授業の主眼はより後期の2つを通読することにあつた。どちらも文学的にも興味深い作品なので(ピョートル時代の世俗物語として有名な『ロシアの船乗り…』のほうは、物語も波瀾万丈だが、その言語も古い要素と近代口語と外来語が混じり合ったマカロニ的混沌を呈していて、そのこと自体が面白い)、この授業はかなりリラックスして楽しむことができた。

いまでも忘れられないのは、『ロシアの船乗り…』のテキストに私が見つけた誤植のことである。講読のテキストにはソ連で専門家によってきちんと校訂された版を使っていたのだが、私はそこに“Слышав же то король и королевна и приидоша в верикой ужес”という箇所を見つけてしまったのである(Русские повести первой трети XVIII века. ред. Г.Н. Моисеева. М.-Л., 1965. С. 209)。これは「王と王女はそれを聞いて、大いなる恐怖に陥った」という意味の文だが、「大きな」を意味する下線部の形容詞は当然 великой (男性単数主格・対格形。「大いなる恐怖」は現代の綴りならば、великий ужас) でなければならない。要するに日本人がよくやる間違いのように、lの代わりに rが入ってしまっているのである。私はこのテキストを予習していたときに目ざとく気づき、妙だなと思っていたので(ソ連の学術書でこの手の単純な誤植は珍しい)、授業でラント先生がどう説明してくれるか、楽しみにしていたのだが、結局この箇所は素通りし、同級生たちも何も言わない。そこでおずおずと「この綴りはこれでいいんでしょうか? lとrが逆転しているように見えますが、こういう現象があるんでしょうか?それとも単なる誤植でしょうか?」と質問をしたところ、ラント教授は一瞬戸惑ってから、テキストを確認して私の質問の意味を理解してにっこり笑い、「校正者が日本人だったのかも知れないね」とウィットに富んだコメントを返した。

ラント教授とは私的に長い会話をする機会はいくらもなかったけれども、集中的な密度の高い授業の中で、このようにウィットとアイロニーの効いた感想や、時にはエピソードが語られることがあり、そのいくつかはいまでも鮮やかに覚えている。例えば、若き日にラントがソ連の高名な言語学者ヴィノグラードフを訪ねたときのこと。緊張したアメリカの少壮の学者に対して、ロシアの大家がいきなりした質問は、「君は一日何時間寝るかね?」というものだった。面食らったラントは、「そうですね、7時間か、8時間くらいでしょう

か」と答える。するとヴィノグラードフは「それはちょっと多いね。私は4時間しか寝ない」と言ったのだという。そしてラントはハーヴァードの受講生たちに向かって、「彼はだからあんなにたくさんつまらないものを書くことができたんだよ」と、一言コメントした。

そう、ラントは学問的には非常に厳しく、言語学的にくだらなと思うものは容赦なく批判した。実際、彼の書いた書評の多くは、非常に辛辣なものである。彼自身はやや寡作であったとように見えるかもしれないが、決定的に重要なものをスラヴ言語学史上いくつも残した。その一つが OCS 文法であることは言うまでもないが、彼が若き日に短期間のフィールドワークの後に書きあげた最初の著書 *A Grammar of the Macedonian Literary Language* (スコピエ, 1952 年) も、英語で書かれた初めてのマケドニア語文法として歴史的な価値を持つ。当時からブルガリアは「マケドニア語などというものはない。それはブルガリア語の方言に過ぎない」と主張していたし、ギリシャはそもそも「マケドニア」という語が勝手に使われることに抗議をしていたのだが、ラントはそういった政治的・民族主義的なバイアスに対して超然と、言語学的事実に忠実であり続けた(当時、ブルガリアの新聞では「このような〈ホラスラントの輩〉(horasluntovci) は不要だ」と書かれ、ラントという学者は「マケドニア語をでっちあげるためにユーゴに雇われたスパイだ」とまで言われたのだという(ラント記念論集に Michael Flier が寄せた序文による。Michael Flier, et al., eds. *Philology Broad and Deep* (Bloomington, Indiana: Slavica, 2014), p. 2.)。ことほどさように、スラヴ語研究に関わるのは、政治やイデオロギーに巻き込まれやすい危険な職業である。しかし、ハーヴァードにおける長年の学究・教師生活を通じて、ラントは毅然と、言語の政治的利用や民族主義的な偏向に反対し続けた。いや、反対し続けたというより、彼の OCS の授業は、政治的利害関係とも民族主義とも無縁の、言語学という科学精神のユートピア的な実験場だったのである。その場にごくわずかな期間とはいえ、身を浸すことができた幸せをいま改めて思う。

\*以下、参考までに私の OCS 授業ファイルから以下の4ページを掲載する。

図版1 提出課題。ラント先生による添削とコメントつき。提出した課題にはいつも丁寧なコメントと評価がついて戻ってきた。

図版2 授業用テキストの一例。

図版3 期末試験。

【図版1】 提出課題。ラント先生による添削とコメントつき。提出した課題にはいつも丁寧なコメントと評価がついて戻ってきた。

This is very good. You can answer in a much more concise form, however. [ ] means information you could omit.

Mitsuyoshi Numano

Zogr. John 9.27-38

27 рѣхѣ

Verb. Aor. ("x-aorist") 1 sg. ~~Inf.: rešiti~~; 3 pl.: rek-otž.

This is the correct form. [ In the case of the "x-aorist", except in 2-3 sg, the final root consonant e becomes ě. ]  
*correct, but basic stem is* ↘  
*True, but not asked for.*

ученици

Noun, masculine. m., pl., Nom., <sup>hard</sup> declension.

Here this word is a predicate of the verb byti and its subject is vy (2.pl), so it takes Nom. pl. form.

[This is the] correct form. [In this case the word undergoes substitutive softening of type II and the consonant k alternates with c.]

28 МОСѢОВУ

Adjective (possessive). m.; pl., Nom., hard declension, short. m., sg., Nom.: mosěovž or moseovž.

[This adjective <sup>Modifies</sup> qualifies] the noun "učenci" (m., pl., Nom.) [and together with it constitutes the predicate of the subject my.]

[This is the] correct form. [although it fluctuates between e and ě.]

29 ВѢДѢ

Inng. Verb. Present, 1 sg. <sup>2</sup> Inf.: věěti; 3 pl.: věě-otž.



【図版2】授業用テキストの一例。ルカ伝 12:16-21 の1ページ目。OCSの文字はラント  
先生の手書き。

Normalized Old Church Slavonic

Luke 12.16-21

РЕЧЕ ЖЕ ПРИТЪУЖ КЪ НИМЪ ГЛАГОЛА: ЧЛОВѢКОУ  
reče (1) že pritzǫž kǫ njimǫ (2) glagolǫ (3): človeku

ЕТЕРОУ БОГАТОУ ОУГОБЪСИ СЯ НИВА. И МЫШЛЯШЕ  
eteru bogatu (4) ugoǫzi sǫ (5) njiva. 17. i myšljaše (6)

ВЪ СЕБѢ ГЛАГОЛА, ЧТО СЪТВОРИЖ, ЯКО НЕ  
vǫ sebě glagolǫ, čto (7) sǫtvorǫž (8), jako (9) ne

ИМАМЪ КЪДЕ СЪБЪРАТИ ПЛОДЪ МОИХЪ? И  
imamǫ (10) kǫde (11) sǫbǫratǫ (12) plodǫ (13) moixǫ (14)? 18. i

РЕЧЕ, СЕ СЪТВОРИЖ: РАЗОРИЖ ЖИТЬНИЦА МОЯ  
reče, se (15) sǫtvorǫž: razorǫž (16) žitǫnice (17) moǫ (14)

И БОЛЪША СЪЗИЖАЖ, И СЪБЕРЖ ТОУ ВЪСЯ  
i bolǫša sǫzižǫž (18) sǫzižǫž (19), i sǫberǫž (20) tu (11) vǫsja (20)

Vocabulary - in order of Cyrillic alphabet

eter-ъ (# 4.1)	a certain	njiv-a	meadow.
žit-o	grain, fruit (general)	pri-tǫž-a	parable
žit-yn-ic-a	barn, store-house	vǫ-zǫd-a-ti (#15.643)	build
mysl-i-ti (#15.1)	think	u-gobǫz-i-ti sǫ	yield richly

Notes. Numbers refer to paragraphs in Lunt's OCS Grammar; in parentheses are references to the pages where the paragraphs are to be found.

1. 10.2, 10.3 (88, also 118), 21.2 (137).
2. 4.25 (53, 54). The кѣ with verbs of saying is common but not exclusive; it surely is due to literal translation ("calque") from the Greek. Page 137, note
3. 8.12 (85), 15.61 (109). This semantically redundant participle is a stylistic device taken from Old Testament Hebrew into the Septuagint, used in the Greek of the New Testament and then literally translated into OCS. So also "ask, answer, command, swear, think ... saying".
4. 13.5f (131) 5. 10.21 (88), 15.1 (99): verbs with sǫ behave approximately like Russian сѣ-verbs. See 21.6, p. 142.
6. 9.21-22 (86); 15.1-11 (99-100); ~~21.5 (136)~~ 21.2 (137)
7. 4.24 (53)
8. 6.221 (82); 5.72 (79); 21 (135) 136-7)
9. 22.3 (144)
10. 6.602 (83); 16.24 (122) 123)
11. 4.811 (67), also 4.813
12. 3.43 (41); 15.644 (111)
13. 4.1 (44, 48); 18.3b (128)
14. page 52
15. 4.22 (52-3); 2.51 (29)
16. 6.221 (82)
17. 3.403 (39); 4.05 (43-4); 4.1 (44)
18. 4.19 (50); 4.71 (66) 19a. 15.643 (110)
19. 15.643 (111), cf. 3.421, p. 40.
20. 4.21 (52)

I. Translate into normal English the following seven passages:

- (1) A. Mar J 2:6 БѢ ЖЕ ВОДОНОСЪ КЪМѢНЪ ШЕСТЬ  
1 ЛЕЖАШТЬ ПО ОУИШЕНЮ ИУДЕИСКОУ . ВЪМѢСТАШТЬ  
(2) ПО 2 ДВѢМА ЛИ ТРЕМЪ МѢРАМЪ.
- (3,4) B. Sav Mt 9:18 ВЪ ОНО 3 КЪНАЗЪ ЕДИНЪ ПРИПАДЕ КЪ 4 ИСУИ  
(a)(5) И 5 ПРОКЛОНИ СЯ ЕМОУ ГЛА . 5 ЯКО ДЪЩИ МОЯ НЪИНА  
(b,c) 6 ОУМРѢТЬ . НЪ ПРИШЪДЪ 6 ВЪЗЛОЖИ НА НЪ РЪКЪ СЯ  
(6) И ОЖИВЕТЪ .
- (7) C. Mar L 10:33 Самарѣтинъ же единъ граде приде 7 надъ  
(8) нь . И вилѣвъ 1 милосрава . и 8 пристѣхъ обѣза  
(9) строупы его 9 възливана оуби и вино .
- (10) D. Ass L 2:6 БѢ ЖЕ ЕГДА БѢСТЕ ТОУ ИСПЪЛНИША СЯ  
(a) 10 ДЕННЕ ДА РОДИТЬ И РОДИ СЪНЪ СВОИ ПРѢВѢТЕНЦЪ  
(d) И 11 ОБИТЪИ И ПОЛОЖИ И ВЪ ТЪСЛЕХЪ . ЗАНЕ НЕ БѢ  
ИМА МѢСТА ВЪ ОБИТЪИ .
- (11) E. Zo Mt 5:29 АШТЕ ЛИ ЖЕ ОКО ТВОЕ ДЕСНОЕ СЪБЛАЖИТЪ  
(12) ТА ИСТЪКНИ Е . И 11 ОТВЕРЪЗИ ОТЪ СЕБЕ . ДОБРЕ БО  
(13) ТИ ЕСТЬ ДА ПОГИБЕЛЕТЪ ЕДИНЪ ОУДЪ 12 ТВОИХЪ . А  
(e,f) НЕ 13 ВСЕ ТѢЛО ТВОЕ ВЪВРЪЖЕНО БУДЕТЪ ВЪ ТЪСОНЪ .
- (g) F. Ass Mt 26:31 Писано бо есть . поража 14 пастыръ .  
(14) И РАЗИДЕХЪ СЯ 15 ОВЕЦЪ СТАДА . ПО 14 ВЪСКРЪСЕННИ  
ЖЕ МОЕМЪ ВЪРЪЖЕ ВЪ ГАЛИЛЕИ .
- (15) G. M L 15:25f БѢ ЖЕ СЪНЪ ЕГО 15 СТАРЪИ НА СЕЛѢ . И  
ТЪКО ГРАДЕ ПРИБЛИЖИ СЯ КЪ ДОМОУ . СЪИША ПѢНИТЪ И  
ЛИКЪИ . И ПРИЗВАВЪ ЕДИНОГО ОТЪ РАБЪ ВЪПРАШАШЕ  
(16) ЧТО ОУБО 16 СИ СХЪТЪ . ОНЪ ЖЕ РЕЧЕ ЕМОУ ТЪКО  
(17) БРАТЪ ТВОИ ПРИДЕ . И 17 ЗАКЛА ОТЧЪ ТВОИ ТЕЛЕЦЪ  
(18) ОУПЪТЕНЪ ТЪКО СЪДРАВА И 18 ПРИНАТЪ .

## II. Translate the following passage at sight:

- (19) Mar Mk 8:22-27  $\dot{\iota}$  πρὶν δε εἶ βλέψαι αὐτὸν;  $\epsilon$  <sup>19</sup> πρὶν βῆσαι  
 κτ̄ νεμου σατ̄τα.  $\epsilon$  μοι ταχ̄κ и σα и ко снет̄ь.  $\epsilon$   
 (h)  
 (20) н ем̄ь за р̄жк̄к <sup>20</sup> са̄т̄та̄го и в̄н̄ъ и в̄си  
 $\epsilon$  п̄ли на оуи его и в̄з ложи р̄жц̄т̄ на н̄ь.  
в̄сп̄ра шад̄ше и аш̄те ӯбо в̄ид̄ит̄ь.  $\epsilon$  в̄з̄бр̄т̄в̄з  
г̄лад̄ше: " з̄р̄н̄я ӯло ст̄ки; т̄ко др̄т̄ва в̄ид̄ел̄я ход̄аш̄та."  
по то м̄ь же пак̄з̄и в̄з ложи р̄жц̄т̄ на оуи его  $\epsilon$   
 (21) с̄т̄вор̄и и пр̄оз̄бр̄т̄и.  $\epsilon$  оу т̄вор̄и са и оу з̄бр̄т̄ <sup>21</sup> в̄с̄а  
с̄в̄т̄т̄во.  $\epsilon$  пос̄ла и в̄з дом̄ъ <sup>его</sup> г̄ла, " ни в̄ в̄с̄ь  
 (22, 23) в̄н̄и ни <sup>22</sup> пов̄т̄жа̄в̄ ни к̄о моу <sup>23</sup> в̄ в̄си :-

Vocabulary: vid̄ssaida Bethsaida utvoriti sē be restored, cured

## III. For the 23 numbered words in the texts above:

- A) name the part of speech and state the dictionary form  
 (basic stem [i.e. infinitive and/or 3 pl: label the basic stem explicitly] or nominative singular masculine, as pertinent)  
 B) give, if pertinent, the gender, number, case, hard/soft declension  
 long/short, active, passive, tense; and account for the syntax of  
 all declined words.

AND

- C) IF the word deviates in any detail from the theoretical forms  
 exemplified in Lunt's paradigms and glossary, write out the "correct"  
 theoretical form and offer an explanation for the deviation(s).

IV. Below are some variant readings corresponding to the lettered words in  
 the texts in Parts I and II above. For each:

- A) Point out the difference(s) between [or among] the forms;  
 B) State the correct form and usage, writing explicitly the "correct"  
 theoretical form or forms and defining as outlined above in III A + B  
 [remember the syntax!];  
 AND C) Offer an explanation for the variation(s).

a. Mar	κλαν̄τ̄ше	e. MarZoSav	т̄сано	g. Mar	ов̄ца
b. Mar	оум̄бр̄т̄ъ	f. Mar	васт̄ыр̄ь	zo	ов̄ца
c. Mar	т̄воӣк	Sav	паст̄оӯха	Sav	ов̄ьа
d. Zo	об̄ит̄и	h. Zo	им̄ъ		

Final. January 21, 1982.